
とある科学の風勢制御《ブラストマニューブ》

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の風勢制御^{プラストマニコープ}

【Nコード】

N4605Z

【作者名】

原石

【あらすじ】

あのパリーな麦野姉さんにもし弟がいたら。そしてその弟が学園都市の第八位で、一歳年上の結標姐さんが幼馴染だったら。そんな特殊な環境で育った主人公が一生懸命生きていくお話です。話は中学二年生から始まります。

第0話 主人公紹介（前書き）

「主人公の能力がチートじゃない小説を書いてみたかった。それだけが望みで……俺はこの小説を書こうと決心したんです」

禁書目録を愛している男

原石

第0話 主人公紹介

むぎの
麦野 龍華 りゅうか

容姿：ほとんど跳ねが見られない男子にしては長めの茶髪。ツリ目のせいで目つきが悪いが、顔のつくりはかなりマトモ。若干、女顔。

身長：【第1章】 156cm

【第2章以降】 165cm

体重：【第1章】 49kg

【第2章】 52kg

性格：メンドクサガリ屋だが、人を放っておけないお人よし。あまり好戦的ではないが、キレると姉譲りの暴走っぷりを見せる。

能力：風勢制御<ブラストマニューブ>

能力説明：風を掌握するチカラ。自分で風を発生させることも可能。体に風を纏って攻撃もできる。

学園都市の第八位。

顔が少し女顔のため、性別を時々間違われてしまうことを気にしている。

二歳年上の姉が一人いて、一歳年上の幼馴染が一人いる。

第0話 主人公紹介（後書き）

「遅刻遅刻遅刻う！！」

学園都市第八位

麦野龍華

第1話 家に帰るまでが遠足（前書き）

「貴方、そんなものばかり食べていたら早死にするわよ？」

学園都市の大能力者

結標淡希

第1話 家に帰るまでが遠足

『学園都市の能力開発技術は、向上の一途をたどっており、この調子で行けば、強能力者以上の能力者の数を増やすことも可能であると専門家は言い』

学園都市の第7学区にある2LDKのマンションの一室で、毎朝六時半から放送されている報道番組がそんなニュースを、淡々とした口調で視聴者に知らせている。無愛想な表情だが何故か人気がある女子アナウンサーの声だ。

そんなアナウンサーの顔をぼーっと見つめている少年こと、麦野龍華は実姉が毎朝用意してくれる「サクサクツ！チョコ風味メロンパン」をもぎゅもぎゅと食していく。

「ごちそうさん」

メロンパンを食べ終わった龍華は洗面所に移動して歯を磨き始める。低血圧な龍華の表情は、起床から三十分ほど経っている今でもぼーっとのペーっとしていた。

十分ほどかけて歯を磨いた後、学校指定の青いブレザーと黒いズボンをもそもそと着用していく。

そして制服を着終わって顔を水で洗ったことにより覚醒した龍華は薄っぺらい鞆を肩に担いで、

「行ってきまーす」

(家から学校まではそう遠くねえ。この調子ならチャイムぎりぎりには辿りつけるはず……ッ!!)

ほら見えてきた。無駄にきれいな白い校舎。無駄にデカくて無駄に生徒数が少ない俺の通っている中学校。校長先生が校門を閉めようとしているけどそうはさせねえ!!

パンパンの足にムチ打ってラストスパートに全てを賭ける。俺に不可能はない!俺は……第四位の弟であり、第八位の超能力者なのだから!

結局、チャイムにはギリギリ間に合った。息も絶え絶えで肩で息をしている俺を見て『だ、大丈夫か……麦野?』と担任が聞いてきたが、俺は満面の笑みで『問題ないっす!!』と答えておいた。人間、笑顔さえあればどんな状況でも乗り切れるもんだ。

んで、四時間目が終わって今は昼休み。俺は昼食を調達するために購買へと向かいますかね。今日はパンでも食うか? いや待て。今日は水曜日だから鮭弁が安く売っているハズ……ッ!!

「そうと決まれば善は急げだな。鮭弁は誰にも渡さねえ!!」

ぐっふっふ。沈姉しんねいですら指をくわえて羨まうらやましがるほどの鮭弁を独り占め……多分他の人も買ってるだろうけど、このクラスでは俺だけで鮭弁を独り占め!! 神よありがとう!!

「待つてる俺の鮭弁たちよ……ぐふえ!!」

頭に走る強烈な痛み。というか痛みよりも先に疑問が俺を支配した。

教室を出ようとしてドアをガラガラッと開けて飛び出そうとしたら、いきなり眉間を鈍器で殴られた。視界にキラキラとした無数の星が見えるのは幻覚だろうか？

「あら？ 龍華じゃない。どうしたのかしら？」

「どうしたのかしら？ じゃねえ!! どう考えても確信犯だろお前!! 出会いがしらに軍用懐中電灯で殴りつけるのは確信犯だろオオオ!!」

猛牛のような叫び声をあげる俺を冷めた目で見つめてくるこの女子生徒の名は結標淡希^{むすじめあわき}。【座標移動^{アップポイント}】という能力を持った大能力者だ。俺の幼馴染で沈姉と犬猿の仲であるヤツ。怒らせたら壁に体を埋め込まれちゃうゾ

そんな淡希にさらなる追撃をかまそうとしたが、俺は鮭弁を買いに行く途中なのだ。こんなところで足止めを食っている暇はない。

「つつーか、今はお前の相手をしてる場合じゃねえんだ!! いざ購買へ!!」

「あ!! ちよつ、待ちなさいったら!!」

「聞こえませーん!!」

淡希が能力を使う前に俺は購買へと猛ダッシュした。

購買で無事に鮭弁を購入した俺は満面の笑みを浮かべて教室へと帰還した。残り三十分ほどのこの休み時間、鮭弁の味を楽しむ時間に費やしてやる！

そんな決意を固めたところで、窓際の俺の席に淡希が座って【健康 爽快サラダ】という市販のサラダの詰め合わせをもぎゅもぎゅと頬張っているところを目撃。

俺はため息を一度ついて前の席に腰を下ろす。

「相変わらずサラダ一筋だなお前。そんなんじゃ早死にすつぞ」

「鮭弁オンリーな貴方にだけは言われたくないわね。野菜も少しは摂らないと」

「バー力。鮭は体にいいんだつーの。よく言うだろ？ 『魚は頭に良い』って」

「すでにLEVEL5であるあなたにそのキャッチコピーは必要ないんじゃない？ 削板じゃあるまいし」

「軍覇は【原石】だから演算してねえんだ。頭が悪いのも領ける。それに俺は第八位なんていう微妙な立ち位置に対して抗議したいくらいだつーの」

「そういうところ、沈利さんに似ているわよね。順位なんてどうでもいいでしょうに」

レタスをフォークでグサツ！と突き刺して口へと運ぶ。不覚にもその動きの流れが優雅だと思ってしまったのはココだけの秘密だ。

知られたらこいつは調子に乗る。間違いなえ。

「工業的価値に基づいての順位付けなんて納得できるかよ」

「でも貴方の能力って八人の超能力者の中で、一番地味じゃない」

「気にしていることをズバツと袈裟斬りにしますねアンタは！ もうちよつとオブラートに包むとかできねえの!？」

「ごちそうさま。じゃあ私は教室に戻るから」

「って話を聞けえ!!」

ヒュンツ！ と、淡希は自分自身をレポートさせて教室へと戻っていった。ホントに便利だよな空間移動系の能力って……俺も使ってみたい。

「はあ……次の授業の準備でもしよ」

俺が溜め息を吐くのと五時間目開始のチャイムが鳴るのはほぼ同時だった。

全授業が終了し、帰宅部の学生にとっての楽園パラダイスである放課後がやって来た。

俺は薄っぺらい鞆を持って教室を早足で出る。今日は早く帰って来いって沈姉に言われているからできるだけ早く帰らねえといけない。今は四時二十六分。指定された時間は五時。余裕で間に合う時間だ。少しぐらい寄り道しても文句は言われないだろう。

「コンビニにでも寄ってくかなー」

そうと決まれば何とやら。

俺はいつもの帰宅ルートから右に逸れて、地下街へと入っていく。この地下街は俺のお気に入り、よく沈姉と一緒に飯を食いに来ている。

俺はそこのあるコンビニを目指して大股で早歩き。

『あ。どこのバカが早歩きなんてしているのかと超思えば、龍華じゃないですか』

ココのコンビニには俺と沈姉お気に入り、鮭弁が販売されている。この時間ならまだ余っているはずだし、アレを確保しておけば遅刻しても怒られないで済む。姉の機嫌取りぐらいお手の物なのだ！

『あれ？ 超シカトですか？ この私を超無視ですか？ そうですかマジですか……』

よし、見えてきたぞ例のコンビニ。今日は珍しく人が少ないみえだ。とりあえず鮭弁を確保して、マンガを一話だけ立ち読みして、それからそれから……予定がどんどん広がっていく！

『もう私超キレましたよ。プツンしましたよ。第八位だとかそんなことは超どオでもいいです。くらえ！ 絹旗ちゃん室素パーンチッ……』

「げぶるわあ……」

右頬にいきなり痛みが走ったかと思ったら地下街の壁に猛烈に熱

いキス。一瞬で視界がブラックアウトし、右腕の関節がぎしぎしと痛みを発している。誰かが俺にサブミッションを決めているようだ。「って何すんだ怪力小学生!!」

俺にサブミッションをかけているこの少女の名は絹旗最愛。きぬはたさいあい【室オフエンズアーマー素装甲】という変わった能力を持った大能力者だ。沈姉の知り合いみたいなんだけど、どんな関係で知り合ったかは知らない。

そんな絹旗は額にビキリと青筋を浮かべ、目以外をにこやかにしながら、

「それは超こっちのセリフです!! 何回声かけたと思ってるんですか!？」

「折れる折れる折れるって!! 大能力者の能力フルパワーで人の腕を折ろうとするんじゃないやありません!! 能力を使う時に大事なことはTPO!!」

「それを超見事に今の状況は当てはまっていますが。とりあえず今は私の怒りを体で超感じてください。大丈夫です。痛みの後は快樂が超待ってますから」

「死!? それは決して体験してはいけない領域じゃね!? つつーか早く家に帰らねえと沈姉にキレられんだよ!!! 責任とれんのか!？」

「それじゃあ尚更家には帰りません。ここで超愉快的死体になりやがれ!!」

ヤベエ。コイツ目がマジだ。俗にいうレイプ目という奴じゃなかろうか。ホントに小学生かコイツ? 凶悪さがすでにヤバ目なライオンなんですけど。

「愉快的死体になりたい人間はこの世にいねえ!! 秘技!!」

第1話 家に帰るまでが遠足（後書き）

「貴方の精神、操っちゃうゾ」

学園都市の超能力者

食蜂操祈

第2話 女の中に男が一人(前書き)

「そんなのはあ、私の包容力でなんとかなっちやうってゆーかあ」

常盤台中学一年生の超能力者

食蜂操祈

第2話 女の中に男が一人

「龍華あー。ちょっと学び舎の園でチョコケーキを十個ほど買ってきてくんない？」

とある休日。毎週のトレーニングとしてジョギングをしている俺は、いつも通りにジャージに着替えて靴を履こうとしたまさにその時、沈姉にそんなことを言われた。

「え」

「オイなんだその反応。まさか私の頼みを聞けないってのかにやーん？」

沈姉が『にやーん？』って語尾に付けるときは決まってお仕置きが付属されている。ここで逆らうと五話ぐらい出番なしとか普通にあり得る。それが存在すら抹消されるとか。おお。学園都市の第四位の一六歳は怖ろしいね。俺も同じレベル5のはずなのに勝てる気が全くしねえもん。

いや確かに俺と沈姉の能力の珍しさは圧倒的に沈姉の勝利だ。原子を崩す能力と風を発生させる能力。攻撃力だって沈姉の方が圧倒的。

だけど俺の能力の方が応用性はあるんだって！！ だからきつとこの能力を完ぺきに使いこなせれば沈姉に勝つことも夢ではないハズ！！

とそんなことを思っているが、口には出さない。命は大切にしないで。

「でもあそこは男子禁制じゃなかったっけ？」

学び舎の園は5つのお嬢様学校が管理しているエリアだ。俺たちの家がある第7学区にあるから沈姉がよく買い物に行ったりはしているらしいけど、俺は一度も行ったことが無い。だって男だからな。

「そうだったそうだった。そんな龍華に私からのプレゼントー
これでお前も立派な女の子だゾ」
「げ」

そう言って沈姉が取り出したのは（どこで手に入れたのかも聞きたくない）セーラー服だった。しかもスカートがイジメと言えるぐらいに短い。太ももがバツチリ出ちまうぐらいには短い。

まさかね。まさか……

「これを俺にどうしろと？」

「これを着て学び舎の園に入っちゃいなさい」

俺は姉のパシリで男としての尊厳を捨てなければならぬというのだろうか。

「断固拒否する！！　ただでさえ女顔で小柄な俺なのに、女装なんてしてしまつたら完璧に女として見られちまうって！！　あそこには食蜂とかいろいろいるんだぞ！？」

「ああ！？　私のケーキとお前の尊厳。どっちの方が大切なんだ？　お前なら言わなくても分かるよなあ？」

ハッ。そんなの決まってる。

「沈姉の………ケーキです（うるっ）」

「ハア………足がスースーする………パッドが入ったブラジャーが邪魔くさい。っつーか何で俺の体ってこんなに女らしいんだ？ もっと筋肉とかつかねえのかな………？」

無事に（？）学び舎の園へ侵入した俺は顔を真っ赤に染めながら、目的のケーキ屋を目指して歩いてきた。周りにいる常盤台中学の生徒とか霧が丘女学院の生徒とかが俺をちらちら見ているのは気のせいだと思いたい。

『（なにあの人。かなり可愛くない！？）』

『（あの制服って見たことないな……。どこの生徒だろ？）』

『（ウブそうな子だねー）』

『けどなんか目つき悪くない？ 射殺されそう………』

気のせいだと………思いたんだッ！

「分かった。ジョギングのせいで足がすらつとしてるのが問題なんだ。もっとハードなトレーニングをすれば筋肉が付くはず。こんど本屋で筋力アップの本でも買ってくるか………」

俺だって男らしい体つきが良いんだよ。ただでさえ女顔なのに華奢な体って………この体のせいでよく女だと間違われるし沈姉には昔

から着せ替え人形みたいな扱いをされるし……俺って全く自慢できる人生じゃないな！！

そんな自虐的な気分にも埋め尽くされまいと俺は決意して、早足でケーキ屋へと急ぐ。短すぎるスカートが捲れている気がしないでもないが、そんなことより今はケーキだ。できるだけ迅速に買い物物を済ませればぎりぎりセーフのハズ。

実はさっきから自分に追い風を向けて速度を上げちゃったりしてる。こんな地味な能力でも、一応超能力者なんです。

「お？ よしよし、見つけたぞ俺の目的地！！ 目指せケーキ屋、急げマイハウスへ！！」

カランコロンカランという何ともピュラーな音を鳴らしながら、俺はケーキ屋の扉を開けた。甘いクリームや果物の香ばしい香りが俺の嗅覚を刺激する。

ヤベ……涎垂れそう。

しかしそこで、俺は人生史上トップを張れるぐらいの危機に直面する。

『じゃあ、ねえー……イチゴシヨートを3つとチョコフォンデュを2つ貰っちゃおっかなあ』

俺の目の前でロングの金髪で無駄に胸がデカく、名門常盤台中学の制服を着た少女がケーキを大量に購入していたんだ。

ケーキを買っていることだけなら問題はない。だけど……この少女の顔にかなり見覚えがあるのは気のせいだろうか？

『フォークはお付けいたしますか？ 食蜂様』

『いるいるいりまーす！！ それと、やっぱりモンブランも欲しい！
一つ追加ねー』

『フフツ。相変わらず甘いものが大好きですね』

『そうなんだよねえ。私は甘いものが無いと死んじゃうのお』

間違いない。この常盤台の少女は間違いなく俺の知り合いの中学一年生だ。嫌だなあ。心理系の超能力者が目の前にいるのって嫌だなー。

早く出てつてくれないかなー、と一心不乱に念じていると、目の前にいる食蜂操祈がぐるん！と俺の方を振り返った。

「！？」

「あつれえ？ おかしいなあ。今、龍華の心の声が聞こえたんだけどあー……気のせいだったみたい」

そう言って再びレジの方を向く食蜂。

た、助かったー……こんなところでこんな姿を見られたら人生が破滅するところだったぜい……

『ありがとうございましたー。次の方どうぞ』

「あ。はい！」

食蜂がケーキを買い終わったところでついにやって来た俺の順番。そんなに待つことが無くてよかったな。俺ってばあんまり待つのが好きじゃねーんだよなー。気い長い方じゃねーし。

「えつとー……チョコケーキを十個とー……メロンケーキを二つくださいな」

……俺がこんな女言葉っぽくなっているのには理由があるのだが、話すと時間をたくさん費やすことになるし俺が話したくないためここでは割愛させてもらうことにしよう。

「はい。それではお会計一万五千元となります」

「いつ!？」

「ど、どうされました？」

「な、なんでもないです。一万五千元ですね。えっと……二万円からでいいですか？」

「大丈夫ですよ」

さっき言葉に詰まってしまったのはこのケーキ屋のある意味破格な値段を目の前にしたからだ。ケーキ12個で一万五千元って……そこらへんの携帯ゲーム機一台分って……学び舎の園のケーキ屋の値段はバケモノか!？」

いや、まあ。それぐらい美味いってことなんだろうーけどさー……なんだろう。この胸に突き刺さる理不尽な気持ちは。これは一体どこにぶつければいいんだろうか。

「五千円のお返しです。ありがとうございました」

よし。ブツは確保した。後は即効で家に帰るだけだ。どうせ沈姉しずねえはどこかに出かけてるだろうし、このケーキを冷蔵庫に保管しておけば何の問題もないハズ。

ってゆーか今日の晩飯とかも考えとかなきゃなー……近くのファミレスでいいや。どうせ沈姉がそこに行くとか言い出すんだろうし。

ケーキを落とさないように気を付けて持ちながら、俺は店の外へと出た。

「待つてたよお。龍華」
「……………」

詰んだ。俺の人生が意味不明なタイミングで詰んだ。

「しよ、食蜂！？ な、なんでまだそこにいるんだ!？」

「心理系能力のスペシャリストである私の目をごまかそうなんて無理っしよ。なんてったって私は学園都市・常盤台中学の女王である第五位の【心理掌握】メンタルアウトなのよ？ 龍華ったらそんなことも忘れちゃった感じい?」

「相変わらず中学一年生に見えないような外見と喋りカタしますねお前は」

「それは褒め言葉として受け取ってあげるう」

俺と同じぐらいの身長の子中学生が目の前にいるという事実に絶望した方が良いのだろうか？ 小柄な俺と長身の食蜂。超能力者はみんな特徴があるんですねー。…………はあ。

「で。何の用だ。俺は早くここから降りてーんだよ」

「あらあ？ そんな話し方してもいいのかしらあ？ ばれちゃうんじゃないのお？ 女装してるこ・と・があ」

「ぐっ……………」

「ほらほらばらしてほしくなかったら私の買い物に付き合いなさい。龍華ちゃん」

「誰が龍華ちゃんだ!! つっーか、俺は早く家に帰らねーといけねーってさっきから何度も」

「ば・ら・す・わ・よお?」

「……………い、行きましょーか、しよ、食蜂さん」

「そうねえ。じゃ、とりあえず下着でも買いに来ましょおー。龍華ちゃん」

「い、いやあ

！！」

「これなんてどお？」

「いいと思います」

「貴方は壁を見ながら人の下着を選ぶのぉ？」

「ぐっ」

無理やり女性用下着売り場に連れてこられた俺は、店の中の壁とにらめっこして難を逃れていたのだが、策略家の食蜂に簡単に破られた。

一度溜め息を吐いて食蜂の方を振り返ったのだが、かなりきわどい下着の数々が視界に入って再び壁とのにらめっこを再開する。

「お願いします食蜂さん。マジで家に帰してください。姉がキレてると思うんです。もしかしたら死ぬかもしれないですよオ！！」

「イヤ」

「ちくしょうそんな返しだと思ったよ！！ でもでも、こればっかりは譲れない！！」

沈姉の怒りを真正面から受け止められるほど俺は大きな男じゃない。下手すりゃ死ぬ。下手しなくても死ぬ。あの姉を怒らせるイコイル死ぬことなんだ！！

俺のそんな気持ちを遂に悟ってくれたのか、食蜂は顎に手を当て

てしばし考え込むと、

「じゃあ私に似合うと思う下着をこの二つから選んでくれたら家に帰してあげるう」

「げ。何でそんなに際どいのが二つ……」

はつきりと言おう。食蜂が手にしているのは『ひも』と『スケスケ』だ。もう勝手に選んでくれたらいいのに。何で俺をこんなことに巻き込むのかな……

「じゃ、じゃあ………紐の方で」

別に欲望に負けたわけじゃない。これは男としての性がだな

結局、食蜂は俺が選んだ下着を購入した。その後、鼻歌交じりで『今度も一緒に買い物に行ってチョーダイな』と俺に無理やり約束させて食蜂は寮へと戻っていったんだ。

「龍華。なんでケーキを買っただけで五時間もかかったのかにやーん？」

「し、沈姉！！これにはかなーり深い事情が」

「それはその紙袋から覗いてる見覚えのない女性用下着が関係して
るのか？」

「へ？ …… ってなんじゃこりゃあ！？ ま、まさか食蜂の仕
業じゃ」

「龍華あ？」

「は、はいなんでしょうか沈姉。できればお仕置きだけは勘弁して
欲しいなあ ……」

「無理」

「チクシヨーやっぱりこうなっちまうのかアアアあああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あ！…！」

とりあえず三日間ぐらい入院することになりました。

第2話 女の中に男が一人（後書き）

「根性って言うのはなあ、絶対に裏切らねーんだ!!」

世界最高の原石である超能力者

削板軍覇

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4605z/>

とある科学の風勢制御《ブラストマニューブ》

2011年12月17日00時58分発行